

寧楽を想う

「あをによし寧楽(なら)の都は咲く花の薫(にほ)ふがごとく今盛りなり」

白樺サロンの会、17年を迎えて

呉谷 充利



つて、ものの形のありようを捉えた古代ギリシアは、比例において、美を定義し、黄金比に至る。

この古代ギリシアの思想と仏教の出会いがガンターラに起こる。紀元前後、その地にガンターラ美術と称される仏教彫刻が生まれる。奈良の仏教美術の

過去と今、未来に見る古都

源は、このガンターラの世界にある。

日本の古代は、聖なるものを近づけたいものとして、目に見えない彼岸に拝した。その在(あ)りようは今日につづく。仏教美術は、この在りよう

を変える。日本に伝播したガンターラ起源の仏教彫刻は邦土の神々を包摂する。神と仏を同じものと見るいわゆる「神仏習合」が奈良時代に現れる。その究極の一表現が、「大日如来」である。

京に遷都したとされる。都を新たな地に求めたこの政治的決断は、文化の面においても大きな変化をもたらす。万葉集に代わって「古今和歌集」が現れる。賀茂真淵のいう、「ますらをぶり」の奈良から「たをやめぶり」の京都へと、歌の世界も変わる。

日本の歴史に見る往古の造形的な工作として埴輪(はにわ)がある。その細工は、実際の家屋や馬、人間などを象(かたど)って作られている。それは、往古の時代を今日に伝える貴重な造形資料で、当時の姿そのものを模した似像であるが、精神性は深くは感じられない。

の世界は、歴史の波に新たな輝きを放つ。奈良は、この新たな芸術の場所としてもありつづける都、永遠の芸術の都なのである。その芸術の生命は、過去、現在、未来に亘(わた)る。

▼運慶の造仏表現と「霊性のリアリズム」
神々は衆生(しゅじょう)を救済するために仏菩薩が姿を変えて現れた化身(垂迹身へすいじゃくしん)であり、その本体である仏菩薩を本地仏

▼迫真の「鎌倉リアリズム」作品群
平城京から平安京へと移るこの歴史は、さらに鎌倉へと進む。が、この時間軸に見る文化にたいして、なお、古都はそのかたちを留め、日本文化の地

仏教が伝来する(538年)。新たな精神文化の時代が始まる。仏教仏は、崇拜的シンボルとして崇(あが)められ、古墳文化を凌(しの)ぐ。仏教の造形的表現に優れて人間的な精神性が表される。その筆頭に法隆寺を巡る美術的作品群がある。とりわけ、シヨット「哀悼(キリスト降架)」(スクロヴェーニ礼拝堂、パドヴァ、伊、1305年)に遥かに先んじる、法隆寺五重塔北面、釈迦入滅の場面を象つた聖像群(711年)は、弟子たちの号泣する悲しみを、眼前にするがごとく、今なお人の心を打つ。盲目の「鑑真和上坐像」(唐招提寺、763年頃)は、しずかにこれにつづく。

▼今日までつづく「美の追求」の系譜
時代をずっと降(くだ)って、世紀を隔て、秘されつづけた法隆寺夢殿のフェノロサと岡倉天心による開扉、辰野金吾の「奈良ホテル」や片山東熊の「奈良国立博物館」を見る明治に、「奈良美術学校設立」の建議が起きる(※2)。日の目を見なかったとはいえず、美の追求は、市井(しせい)に絶えずにつづく。大正期、和辻哲郎の『古寺巡礼』、会津八一の『南都新唱』が世に出、高畑に画家の「コロニー」ができる。志賀直哉は美術録『座右宝』を編集し、1929(昭和4)年、同地に自邸を造る。その後、1973(昭和48)年に奈良県立美術館の開館を見る。

(ほんじぶつ)とし、伊勢神宮は、大日如来または救世(くぜ)観音をこの本地仏とする(※1)。

この時代に、「ますらをぶり」の古代でもなく「たをやめぶり」の貴族文化でもない、新たな精神文化が生まれる。南都奈良の鎮護国家の仏教にたいする、新たな仏教の精神世界、浄土信仰における法然、親鸞、さらには一遍の時宗、禅宗の栄西や道元などである。「鎌倉リアリズム」の作品群は、この精神文化を迫真のものにしている。

▼永遠の芸術の都としての古都・奈良
鈴木大拙は日本の霊性の結晶を鎌倉時代にいう。その霊性をまさに目に見えるものにして、無著像(運慶、興福寺北円堂、1208年)は、悲喜を超えた静謐(せいひつ)に立っている。地中海に、ミロのヴィーナス像(紀元前2世紀前半)が生まれ、アルプス以北のパリにアダム像(クリュニー美術館、13世紀半ば)が生まれたごとく、海洋を隔てた東洋の古都に比類なきこの彫像が生まれ出たのである。

時代をずっと降(くだ)って、世紀を隔て、秘されつづけた法隆寺夢殿のフェノロサと岡倉天心による開扉、辰野金吾の「奈良ホテル」や片山東熊の「奈良国立博物館」を見る明治に、「奈良美術学校設立」の建議が起きる(※2)。日の目を見なかったとはいえず、美の追求は、市井(しせい)に絶えずにつづく。大正期、和辻哲郎の『古寺巡礼』、会津八一の『南都新唱』が世に出、高畑に画家の「コロニー」ができる。志賀直哉は美術録『座右宝』を編集し、1929(昭和4)年、同地に自邸を造る。その後、1973(昭和48)年に奈良県立美術館の開館を見る。

は、それまでの仏像のシンボリックな表現に新たな人間的面持ちを見せる。「鎌倉リアリズム」と称される、この表現は新たな人間的な生命を仏像に現す。神仏習合において生まれる本地垂迹説、仏が神の姿を以て現れるというその考え方は、別の視点から見れば、信仰の問題を芸術の一表現へと変えて、発展したとも言いがたい。ひと言でいえば、霊性のリアリズムである。

この時代に、「ますらをぶり」の古代でもなく「たをやめぶり」の貴族文化でもない、新たな精神文化が生まれる。南都奈良の鎮護国家の仏教にたいする、新たな仏教の精神世界、浄土信仰における法然、親鸞、さらには一遍の時宗、禅宗の栄西や道元などである。「鎌倉リアリズム」の作品群は、この精神文化を迫真のものにしている。

▼仏教伝来で新たな精神文化の時代に
「咲く花のよほふがごとく」都を見てから、百年足らず、増大し続ける仏教勢力に対抗して、朝廷は平安

令和の2021年、シヨパン・コンクールでみごとく成績を修めた若きピアニストが、活動の拠点を、東京ではなく奈良に構える。彼が惹(ひ)かれたものに、古都に永(とこ)くこの芸術の生命があったことは言うまでもない。

その気持ちの中に彷彿(ほうぶつ)するものは、過去と今、未来に見る古都である。「咲く花の薫(にほ)ふがごとく今盛りなり」、過ぎ去りし栄華があればあるほど、その眩(まばゆ)い光に、未来はその影を失くし遠のく。過去の美、そのものは、今のそれではなく、いわんや未来のものでもない。一抹の寂寥(せきりょう)のゆえんは、そこにあるのかも知れない。

▼奈良の仏教美術の隆盛と「神仏習合」

奈良に仏教が伝来し、仏教美術の隆盛を見る。見事な彫刻群が美を競つ。見えない神の存在を人類史において目に見えるものにしたのが、古代ギリシアである。アナクシア(類比)を以(も)



奥深い奈良の仏教芸術



白樺サロンの会「志賀直哉旧居講座」で講演する筆者(右端) =2023年6月19日、奈良市高畑町の志賀直哉旧居

は、それまでの仏像のシンボリックな表現に新たな人間的面持ちを見せる。「鎌倉リアリズム」と称される、この表現は新たな人間的な生命を仏像に現す。神仏習合において生まれる本地垂迹説、仏が神の姿を以て現れるというその考え方は、別の視点から見れば、信仰の問題を芸術の一表現へと変えて、発展したとも言いがたい。ひと言でいえば、霊性のリアリズムである。

この時代に、「ますらをぶり」の古代でもなく「たをやめぶり」の貴族文化でもない、新たな精神文化が生まれる。南都奈良の鎮護国家の仏教にたいする、新たな仏教の精神世界、浄土信仰における法然、親鸞、さらには一遍の時宗、禅宗の栄西や道元などである。「鎌倉リアリズム」の作品群は、この精神文化を迫真のものにしている。

▼仏教伝来で新たな精神文化の時代に
「咲く花のよほふがごとく」都を見てから、百年足らず、増大し続ける仏教勢力に対抗して、朝廷は平安

令和の2021年、シヨパン・コンクールでみごとく成績を修めた若きピアニストが、活動の拠点を、東京ではなく奈良に構える。彼が惹(ひ)かれたものに、古都に永(とこ)くこの芸術の生命があったことは言うまでもない。

(※1)参考文獻『日本の神仏の辞典』、大修館書店、2001
(※2)平瀬礼太、奈良美術学校頭末、『りずむ 第十三号』所収、白樺サロンの会、2024・3